

おく だ すけ しち ろう

奥田助七郎

名古屋港の生き字引

— 港の発展に生涯を捧げた技術官僚 —



奥田助七郎（1873～1954）
名古屋ガーデンふ頭の奥田助七郎胸像

■ その生涯

1898(明治31)年に江木干之知事のもとで熱田築港計画が変更され、以後、名古屋港の建設が本格的に進められたが、黒田豊太郎とともにその中心となったのが奥田助七郎である。

奥田は、1873(明治6)年、京都府生まれ。京都帝国大学土木工学科を卒業し、1900(明治33)年、愛知県庁の土木技師に採用されて熱田築港事業に従事した。貯木対策・人造石工法などの研究にもつとめ、1920(大正9)年には名古屋港務所長となる。1940(昭和15)年に退官するまで港の発展にその生涯を捧げた。また、自ら筆を執り『名古屋築港史』を編纂した(昭和28年に刊行)。1954(昭和29)年に死去。その功績を称え、名古屋港ガーデンふ頭の入口に胸像が設置されている。

■ ろせった丸の誘致と林治定船長

奥田の功績として広く知られているのは、1906(明治39)年9月、大型のクルーズ船ろせった丸(3876トン、約105メートル)をまだ開港前の名古屋港に寄港させたことであろう。

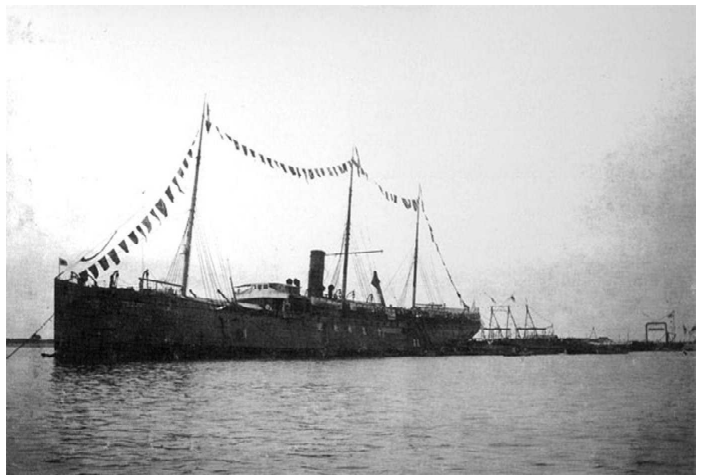
ろせった丸は1880(明治13)年、北アイルランドのハーランド・アンド・ウルフ社が建造。1900(明治33)年、日本のセメント王と呼ばれた浅野総一郎に売却され、日本郵船や東洋汽船などで使用された。

1906(明治39)年7月に日本初のクルージングとされる朝日新聞社主催の満韓巡遊に就航した。同年9月からは報知新聞主催の巡航博覧会船として各地を巡遊していた。

同船は本来武豊港、四日市港に寄港する予定となっていたが、奥田は船長の林治定に名古屋港への寄港を要請した。建設中の港への大型船の入港は座礁などのリスクが大きく、従来の入港実績は横須賀水雷団所属の水雷艇6隻、イギリス駆逐艦6隻のみであった。しかし林は名古屋港を最もよく知る奥田が自ら水先案内人を務めることを条件として入港を受諾した。

林治定は、熊本県生まれ。治定の母の矢嶋楯子は、婦人矯風家として著名な教育者である。また、徳富蘇峰・蘆花とは従弟になる。「熊本バンド」に入信したクリスチャン。熊本洋学校・同志社で学んだのちに船乗りを志し、1884(明治17)年、東京商船学校航海科を卒業した。

ろせった丸の入港にあたっては、鉄栈橋が未完成のため、土運船を並べて臨時の栈橋として係留した。十数万人が観覧のため来船したといわれる。当時はまだ築港事業の成否を不安視する者が少なくなかったが、大型船の入港に成功したことが新聞に報じられるなどして大きな話題となり、名古屋市民の築港事業に対する理解を進めることになった。



入港した「ろせった丸」

名古屋港管理組合所蔵



「ろせった丸」歓迎アーチと訪れた見物人 名古屋港管理組合所蔵

(真野素行)